

京都大学生協 PC 活用講座における学生意識に即した講座づくり

本池 雅貴*1・左良 有佑*2・中野 峻太郎*3・中野 龍二*4・橋本 智行*5・芳賀 祐馬*6
 岩岡 創*7・若松 広之*7
 Email: pc-kouza@s-coop.net

*1: 京都大学農学部, *2: 京都大学文学部, *3: 京都大学経済学部, *4: 京都大学理学部,
 *5: 京都大学工学部, *6: 京都大学大学院農学研究科, *7: 京都大学生協同組合

◎Key Words パソコン講座, 生協活動報告

1. はじめに

京都大学生協 PC 活用講座は、「受講生が PC を用いて自らの意見をレポートやプレゼンテーションという形で的確に表現し、相手に正しく伝えることができるようになること」を目的とし、新入生を対象に開講している。講座の運営は京都大学の学生スタッフが中心であり、講義内容の決定も学生スタッフで行われる。扱う内容はソフトウェアの操作のみにとどまらず、レポート作成法やプレゼンテーションのノウハウまでと多岐に渡る。

これらの内容を扱う理由としては、本講座の学生スタッフが、高校の授業及び大学の講義では大学生の実情にあった PC の活用法を十全には扱いきれていないのでは、との問題意識を抱いたことにある。

本論文では、講義で扱う内容について述べつつ、学生スタッフの抱く問題意識に即してどのように講義内容の決定がなされているかを詳しく紹介する。その上で、受講生の作成物や講座終了後アンケートをもとに現時点での講座の成果を報告する。

2. 講座の概要

2.1 講座の形式

本講座は、大学の前期授業期間である 4 月上旬から 7 月上旬にかけて行われ、受講生は全 6 回・各回 90 分の講座を隔週で受講する。

講義とグループワークの 2 つの形式を場面ごとに使い分けている。グループワークでは、スタッフ 1 人が固定のアドバイザーとして、1 班 6 人を基本とした受講生を指導している。講義を行う講師も含めて、講座を運営しているスタッフは、皆京都大学の学部生もしくは大学院生である。

2.2 講座の準備状況

本講座では、30 人程度の学生スタッフが、10 月から 3 月にかけて扱う内容ごとにチームに分かれ、講座で使用するスライドや演習課題、配付資料、さらにはテキストを作成している。

そして、3 月には本番前の確認として模擬講義を月初めと月末にそれぞれ行う。

また、これ以外にも、新規スタッフ募集説明会やスタッフ研修もスタッフ内で行っている。

3. 2011 年度講座の内容

講義内容は、レポート・プレゼンテーション作成のための基本概念及び必要とされる PC 活用スキルを中心としながら、メールマナーなどの情報倫理も幅広く扱う内容となっており、近年は Skype や動画編集などの発展的な内容も盛り込まれている。2011 年度は、次の表 1 にあるカリキュラムで全 6 回の講座を開講した。

表 1 2011 年度のカリキュラム

回	内容
第 1 回	考え方入門 情報検索 セキュリティ・メールマナー
第 2 回	レポートの構成 Word
第 3 回	データの活用 Excel
第 4 回	レポート相互評価 プレゼンテーション準備
第 5 回	PowerPoint プレゼンテーション発表のスキル
第 6 回	プレゼンテーション発表 Skype

表 1 のカリキュラムにおいて、特にレポート・プレゼンテーションに関わる内容で学生の問題意識を反映し取り入れられたものが多い。

レポートに関しては、第 1 回の考え方入門で、論理的に考える力を身に付けることを目的に、前提から結論に至る論理展開の真偽を議論するグループワークを行った。第 2 回のレポート構成では、「序論・本論・結論」というレポートの基本構成の一例を示し、第 1 回の考え方入門と組み合わせ、論理的なレポートの書き方の習得を目指した。

プレゼンテーションに関しては、第 4 回のプレゼンテーション準備で、実際にスライドを作り始める前段階として、プレゼンテーションの構成やわかりやすいスライド作成のノウハウを扱った。また、スライドの下書きを手書きで作成することにより、PC スキルに制限されないスライド作成準備を行った。

4. 問題意識に即したコンテンツ作り

4.1 レポート・プレゼンテーションの重要性

本章では、ここまで述べてきた本講座の概要及び2011年度の取り組みの内容を踏まえ、学生の問題意識に即して講義内容がどのように変化してきたかを述べる。

まず“PC”活用講座であるにもかかわらず、レポート・プレゼンテーションが講義内容の柱として位置づけられていることが、学生の問題意識に即した講座づくりの結果の1つであると言える。

大学生活において、各種講義の課題としてレポートを作成することは避けて通れない。だが、実際の大学講義においては、レポート・プレゼンテーションの作成手法について講義がなされることは稀であり、学生は自ら積極的に学ばない限り、レポート・プレゼンテーション作成に関して知見を得る機会がないのが実情である。

レポート・プレゼンテーション作成を取り巻くこのような状況は、本講座の黎明期から、学生スタッフの間で課題として認識・共有されていた。そのことも相まって、新入生の大学生活が多種多様な中で、新入生が購入したPCを実際の大学生活において確実に活かせる状況を考えた際に、レポート・プレゼンテーション作成に関わる内容が講義内容に採用された。これらの内容は受講生からも評価されており¹⁰、レポート・プレゼンテーション作成は講義内容の柱として扱われ続けている。

レポート・プレゼンテーション作成に関する講義内容は、初年度から現在の形をとっていたわけでは決してなく、学生スタッフがその年に抱いた問題意識に沿って、徐々に改良されている。次節からは、問題意識の観点から近年の講義内容の変化について述べる。

4.2 レポート

4.2.1 2010年度の取り組み

2010年以前の講座では、「問い-仮説-証明-答え」という章立てのフレームワークに沿ってレポートの内容を教えていた。具体的には、受講生には、自ら問いを考え、考えた問いに対して仮説を立て、論証を行い、結論を導くことがレポート作成の過程として求められていた。

この内容に対し、レポートの章構成とレポートの作成プロセスが混同されて教えられていたことが2010年度のスタッフから問題意識として挙げられた。実際のレポート作成過程においては、レポートの章構成に従っていきなり書き始めることは稀であり、書き始める前に、ブレインストーミングなどによるレポートの中心となる問題意識の整理、議論の流れとなる論理的な主張の構成、さらには文献やインターネット等を活用した客観的な根拠の収集を行うといった作成プロセスが基本となる。

そこで2010年度の講座では、レポートの作成プロセスとして「問題意識の整理」「論理的な主張の構成」「客観的な根拠の収集」という3要素をレポート作成の準備段階の内容として提示し、「問い-仮説-証明-答え」という章構成から切り離れた。

また本講座では実際にレポートを執筆することを宿題として課しておりスタッフによる添削を行っている。2009年度はアウトライン・完成稿と2回の提出だったが、2010年度はアウトライン・初稿・完成稿と3回に分けて提出させ、レポートの添削体制を強化した。

4.2.2 2011年度の取り組み

前節で述べたように2010年度の講座では「問題意識の整理」「論理的な主張の構成」「客観的な根拠の収集」という3要素をレポート作成の準備段階として提示したが、これらの内容がレポート特有の内容として理解されてしまうという問題が発生した。論理性及び客観性は、レポート作成時のみではなく、大学生活において幅広く必要とされる上位概念のはずである。しかし、論理性及び客観性をレポートの話の一部としたので、説明が不自然になってしまった。

また、理解において自ら考えることが重要なはずの論理性の内容に関しては、グループワークが存在せず、講師が説明するだけであったので、受講生から提出されたレポート課題において、受講生の論理性の理解度はあまり望ましいものではなかった。

加えて、「問い-仮説-証明-答え」という章立てのフレームワーク自体にも問題があった。「問い-仮説-証明-答え」という章立てのフレームワークにおいては、受講生が自ら独自性を有した問いや仮説を考えるということが重視されていた。しかし実情として、研究論文としてならまだしも学部1年目の学生が作成するレポートにおいて独自性が求められることはあまり無く、まずは論理的かつ客観的に議論を展開できることを重視するべきだという問題意識があった。

上記のような内容をスタッフが問題視したことにより、2011年度の講座では、大きく2つの変更がなされた。

1つ目に、論理性及び客観性の説明を一般的な概念としてレポートから切り離し、「考え方入門」として独立させて、「前提から結論を導く」という考え方の枠組みをレポートの話に入る前に提示することとした。そして、レポートに関しては、「自らの考えをアウトプットする形式の1つ」として、再定義した。その上で、グループワークとして論理性に関するケーススタディを複数用意することにより、受講生が論理的な議論展開に関して自ら考えさせる機会を増やし理解度の向上を狙った。

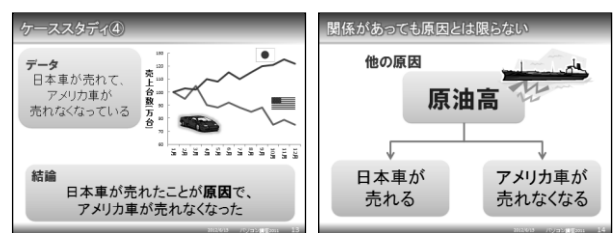


図1 ケーススタディのスライド例

2つ目に、レポートを「自らの考えをアウトプットする形式の1つ」と再定義したことを踏まえ、考え方入門での「前提から結論を導く」という考え方の枠組みを自然に反映でき、かつレポートとしても適切な文章構成である「序論-本論-結論」を「問い-仮説-証明-答え」に代わって採用し、新たな章立てのフレームワークとした。その結果、前提が序論に対応し、結論を導く過程が本論であり、最後に結論を配置するというように、統一された包括的な説明が可能となった。

4.3 プレゼンテーション

4.3.1 2009年度までの問題点

2009年度までは、WordやExcelのコンテンツと同じく、プレゼンテーションのコンテンツではPowerPointの機能を教えることを中心としていた。加えて、プレゼンテーションの内容としても、まずはこれまでに受講生に書いてきてもらったレポートを貼り付け、その後に文字をどんどん減らしていくという手法を取っていた。だが結果として、相手を魅了するようなプレゼンテーションスキルを受講生に身につけさせるという目的は十分には果たせていなかった。その原因として、スタッフ全体がプレゼンテーションに関して十分な知識を持っていなかったということが挙げられる。

4.3.2 2009年度までの問題点に対する改善策

プレゼンテーションに関するビジネス書や就職活動セミナー参加で得た知識を活かす等して、知識の洗い直しを図った。その結果、「ストーリー・スライド・喋り」(以下3S)という3カテゴリを中心に教えることで実践的なプレゼンテーションスキルを受講生に身につけさせることができるという総意を得られた。

表2は2007年度以降の講義内容をカテゴリ分けしたものである。2009年度以前も講義内容を3つにカテゴリ分けしてきたが、2010年度以降においてそれ以前と大きく異なる点は、カテゴリCにおいて、より実践的な内容を導入し、受講生の役に立つよう工夫した点である。これまでの講座では、話すスピードやジェスチャーなどといった具体的なプレゼンテーションの手法は注意の呼びかけのみにとどまっていたが、簡単な実例を見せたり実際に話したりすることで実践的に習得させることをこの「喋り」で目指した。

また、「スライド」においても、2009年度以前のように、まずはスライドにレポートを貼り付けさせるというようなことはさせず、スライドはあくまで発表者を補足するものであるという立場から、聴衆が見やすくするように工夫させるといったものに変更した。文字数を少なくする、聴衆の視覚的理解を促すために図を多くするといったことがこれに含まれる。さらに、予めスライドの下書きを手書きで作成することにより、PowerPointの操作スキルに制限されないスライド作成準備を体験させた。

表2 プレゼンテーションのカテゴリ分けの遷移

年度	カテゴリA	カテゴリB	カテゴリC
2007	内容の決定	配付資料・スライド作成	原稿の作成練習
2008	ストーリーの組み立て	資料の作成	リハーサル
2009	主題	デザイン	リハーサル
2010	ストーリー	スライド	喋り
2011			

5. 本講座における取り組みの評価及び考察

5.1 レポート

宿題として提出されたレポートの添削では大きく分けて「WordやExcelを活用し体裁が整えられているか」「論理的・客観的な考え方に基づいて書かれているか」の2点をチェックしている。特に後者については講義中の演習だけで受講生の理解度を測ることが難しく、宿題のレポートで実践できているかどうかが重要となる。

レポートの分量や内容が受講生によって異なるため定量的な評価をすることはできないが、アウトラインや初稿の段階では論理的な議論展開に改善すべき点が見られるレポートがほとんどであった。これは受講生の理解度に起因するものも考えられるが、WordやExcelの活用に比べ、講義内容を踏まえた論理的な議論展開を実際のレポートへ応用することが難しいことにも原因があると考えられる。

しかしながらこれらの多くは繰り返し添削で指摘することで、完成稿までに改善されている。一度の添削で指摘しきれなかった箇所を添削回数が増えたことによりカバーできるようになったこと、また考え方入門で扱った内容に沿ったアドバイスや「序論-本論-結論」のフレームワークに基づいた簡潔な説明が可能になったことで、レポート添削でのアドバイスがやりやすくなったとスタッフから評価されている。これらの点において取り組みの効果があつたものと考えられる。

一方で2011年度の講義は重点的に触れられていなかった前提の確認(言葉の定義、状況の設定、評価基準の設定など)に当たる部分が不十分なレポートが散見された。これらについても添削でのアドバイスにより改善はされているが、次年度以降の講義の中でどの部分を重点的に扱うかを考える際に重要な問題意識になると考えられる。

5.2 プレゼンテーション

プレゼンテーションの講義の結果が受講生のスライドにどれほど反映されているのかを確認するため、2009年度から2011年度にかけての受講生の作成したスライドを比較してみたところ、ほとんどの受講生はストーリーを意識し講義で学んだスライドデザインがしっかりと反映されたスライドを作ることができていた。またそのスライドデザインに関して取り上げると、特に2009年度から2010年度の間で大きな改善があつたように思われる(図2, 図3)。本講座では前述の通り2009年度以前は受講生に書いてきてもらったレポートを貼り付け、その後に文字をどんどん減らしていくという手法を取っていたために、実際2009年度の受講生の作ったスライドは2010年度、2011年度の受講生の作ったスライドと比較した場合文字が多く複雑で見づらいスライドが多かった。そのため、それを改善するために導入した3Sは大きな成果であつたと考えられる。

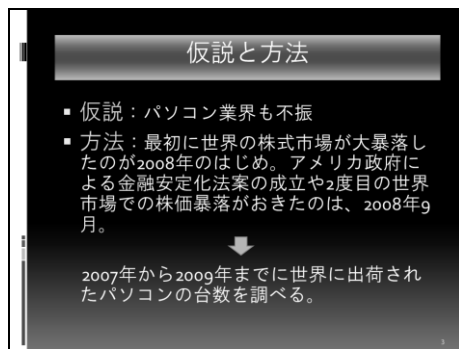


図 2 2009 年度受講生の作成したスライド

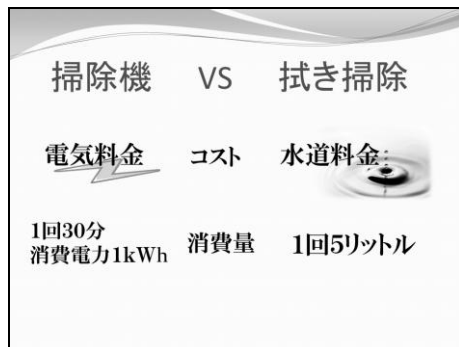


図 3 2010 年度受講生の作成したスライド

2010 年度において、2009 年度以前のような見にくいスライドは減り、発表においても一定の効果を示すことができたため、2011 年度では 2010 年度のものを引き継ぎ、その内容を改善するという形でコンテンツ作りが行われた。2011 年度においても、この 3S は一定の効果を発揮し、受講生のプレゼンテーションスキルの向上を促すことに成功した。

5.3 最終アンケート

講座の運営目的や全体を通じて重視したことを受講生がどう受け止めたかを検証するため、講座の最終回にアンケートを実施した。2011 年度の回答者数は 74 である。以下に結果の一部を抜粋する。

Q.

講座の良かった点は何ですか？

(複数回答、回答項目数 11, 平均回答数 5.3)

A.

大学生のパソコン活用法がわかる (57)

レポート作成法が学べる (61)

プレゼンテーションや発表の練習ができる (51)

上級生としての経験をもとに大学生活に関連した講義内容の選定を行なっていることが半数以上の受講生に評価されている。「レポート作成やプレゼンテーションの勉強は他ではなかなかできないので、貴重な機会だった」などの感想も見受けられた。

その一方、講座の悪かった点として、「宿題(主にレポート)の負担が大きかった(43)」と過半数の受講生が答えており、実践的な課題の実施と受講生に対する負担の増加の板挟みが見てとれる結果となった。

6. おわりに

本講座は、新入生が大学生活を送っていく上で必要となってくる PC の活用法を、レポート作成やプレゼンテーションのノウハウを学ぶ過程で教えてきた。その講義内容は学生スタッフ自らの問題意識に即して年々変革を重ねてきており、2009 年度から 2011 年度にかけて、レポートのコンテンツではレポートの章構成と作成プロセスを整理し、論理性・客観性はレポート以外にも幅広く応用できるよう考え方入門として独立させた。プレゼンテーションのコンテンツでは 3S の導入により受講生へ実践的なプレゼンテーションを習得してもらうことを図った。その結果として、受講生のレポートやプレゼンテーションスライドといった作成物の完成度は以前の講座と比較すると向上してきていることが見て取れ、また受講生へのアンケートの結果からも本講座は大きな成果をあげたと言えるであろう。

一方で、毎年内容を見直し修正を加えている本講座ではあるが、レポート執筆を体験させるために課した宿題の負担であったり、講義で扱うプレゼンテーションスキルの程度の検討であったりといった様々な反省点が存在している。今後、これらの反省点を踏まえ、より受講生のニーズに合致した講座を運営する考えである。

謝辞

本稿の執筆にあたり、本講座の運営に関わってきたスタッフ各位に感謝の意を表します。

参考文献

- (1) 桶谷直樹, 西川未来子, 吉木優太, 高橋将太, 宮澤佑樹, 藤本成彬, 世戸貴大, 岩岡創, 風折昌樹: “上級生から下級生へ「伝える」ことと「学び合い」を利用した学習手法~京都大学生協 新入生向け PC 活用講座の取り組みをもとに~”, 平成 22 年度情報教育研究集会論文集 (2010).
- (2) 宮澤佑樹, 高橋将太, 世戸貴大, 藤本成彬, 橋本智恵美, 中森一朗: “京都大学生協 新入生向け PC 活用講座の取り組み”, 平成 19 年度情報教育研究集会論文集 (2007).